

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

## 母への想い

鳥越中学校二年

竹田 たけだ

陽葵 はるき

わたしの母はおっとりしている。その一方で、毎日毎日、わたしたち四人の姉弟を育てながら、いろんな家事をしてくれる。わたしは、そんな母をとて尊敬している。

今年の七月、弟が入院することになった。弟はまだ四歳なので、母も一緒に入院した。三週間弱ほど、母なしの生活になった。家事をする人がいなくなってしまう。祖母はまだ元気だが、畑仕事もあって、いつも辛そうにしている。わたしがやるしかないと思った。いざやってみると、夕ご飯を作るだけでも大変で、もうやめたいと思った。それで、母の偉大さを実感した。母は毎日、こんな大変なことを一人でしているのだと分かり、いつも何でも頼んでしまっと思って申し訳ないと思った。それと同時に、少しでも母の力になりたいとも思った。できることはたくさんやって、役に立ちたいと感じた。

弟が病气だと分かったとき、母は大きなショックを受けただろう。それなのに、母は元気に明るく、わたしたちと接してくれていた。でも、わたしは知っている。手術の説明を受けたとき、母は涙ぐんでいた。それを見て、わたしが母を支えたいと思った。でも、母はその後はいつもと変わらず堂々としていた。病院にいる母に電話をすると、いつもわたしを気遣い、励まし、元気づけてくれた。わたしは、そんな母を強い人だと思った。

母のいちばんすばらしいところは、わたしを安心させてくれるところだ。母といると、なぜかわからないけれど、安心する。ほっとする。きっと、母にとってわたしは、言うことを聞かないわがままな子なのだろうけれど、わたしにとっての母は、一緒にいると安心できる大切な人だ。そんな母にわたしは、いつも迷惑をかけている。朝は起きないし、洗濯物は出さないし、たまたんだ洗濯物を自分の部屋に持ってあがらない。そんなわたしに、母はいつも注意する。正直、うっとうしいと思っている。でもそれは、わたしをだめな大人にしないためにしかつてくれているのだと思う。そうと分かってはいるけれど、わたしはいつも冷たくしてし

まう。何か言われても、無視したり、「うん。」という返事だけしかしなかったりする。それでも母は、毎日明るく話しかけてくれる。だから、ごめんねと言いたいと思う。そして、いつもありがとうという感謝の気持ちも伝えられるようになりたいと思う。母は、誰に対してもちゃんと「ありがとう」「ごめんね」が言える人だ。わたしはこの二つの言葉を言える人を尊敬している。わたしは言えないからだ。母のそういうところもわたしは好きだ。

わたしは、小学校で六年間、ミニバスケットボールをしていた。六年間続けてこられたのは、母のおかげだ。練習がある日は毎日送り迎えしてくれて。大会の日は、「いってらっしゃい。頑張れー！」と送り出してくれた。だから、試合を精一杯頑張れた。弟の世話で忙しいのに、試合を見に来てくれたこともあった。わたしが帰ると、「おかえり。どうやった？」と聞いてくれた。結果を報告すると、良い結果のときは、「すごい！頑張ったねえ。」と褒めてくれるし、残念な結果のときには、「惜しかったね。次いつや？頑張りがや。」と励ましてくれる。そうした母の言葉があったから、わたしは楽しくバスケットを続けることができたのだ。卒団式にも、忙しいなか来てくれた。でもわたしは、まだお礼を言えていない。いつか、言えるようになりたいと思う。

これから、わたしが大人になっていくまでに、母と意見が合わなかったり、衝突したりするかもしれない。それでも、これからは冷たく突き放したりせず話し合い、仲の良い親子になりたいと思う。そして、わたしが小さいころ約束した、二人で Mr. Children のライブに行くことも果たしたいと思う。

母はおっとりとしていて優しいが、強くたくましい人だ。こんなことは恥ずかしくて直接言えないけれど、わたしはそんな母が大好きだ。これからもその気持ちは変わらない。大好きな母を傷つけないように、悲しませないようにしたい。逆に、喜ばせてあげられるような行動をたくさんしていきたい。母にはいつも感謝の気持ちでいっぱいだ。その気持

ちを、言葉でなくてもいいから、伝わるように表していきたいと思う。  
母は、わたしにとって唯一無二の存在だ。わたしを生んでくれた人は、  
母一人しかない。その母に感謝しながら、日々過ごしていきたい。

